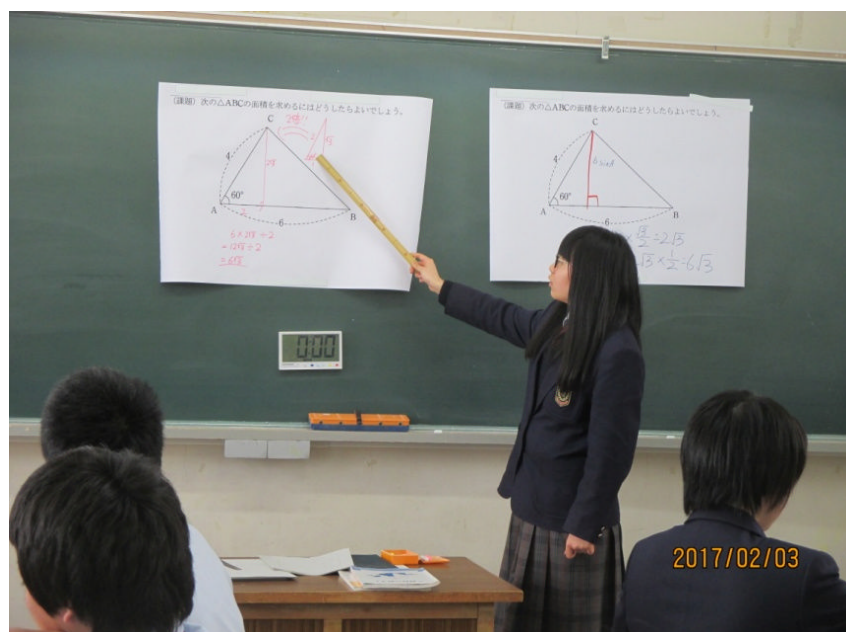


平成28年度

高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための
調査研究事業検討会議

報告書

〈第一期〉



山形県立庄内総合高等学校

山形県教育委員会

目 次

高校生の基礎学力定着に向けた学習改善のための調査研究事業について

山形県教育委員会

はじめに

「実践研究校の指定を受けて」

山形県立庄内総合高等学校長 高 橋 たず子

「高校生の基礎学力の定着・向上に向けたアクティブラーニング型授業の実現」

京都大学高等教育開発推進センター教育学研究科教授 溝 上 慎 一

I 事業計画

- 1 本校の概要（教頭） 1 ページ
- 2 これまでの本校基礎学力定着に向けた取り組み（教頭） 2 ページ

II 研究について

9 ページ

- 1 現状と課題（教頭）
- 2 事業概要（県）
- 3 調査の具体的内容・方法（五十嵐）
- 4 推進委員会（県）
- 5 校内委員会役割・組織図（教頭）

III 事業報告

- 1 第1回検討委員会（平成28年8月30日実施） 3 ページ
 - （1）研究授業、検討会議の記録（小松）
 - （2）講演記録（小松）
 - （3）検討委員所属各校の基礎学力定着に向けた取り組みについて 7 ページ
 - ① 県立霞城学園高校 教諭 後 藤 智 子
 - ② 県立左沢高校 教諭 高 橋 暢 広
 - ③ 県立新庄北高校最上校 教諭 石 川 奈 津 子
 - ④ 県立置賜農業高校 教諭 樺 澤 智
 - ⑤ 県立鶴岡南高校山添校 教諭 御 橋 百 合 子
 - （4）中学校の立場から参加しての感想
 - ⑥ 庄内町立立川中学校 教諭 武 田 明 也
 - ⑦ 庄内町立余目中学校 教諭 風 間 成 彦
- 2 第2回検討委員会【第2回山形アクティブ会】（平成29年2月3日実施） 3 ページ
 - （1）研究授業、検討会議の記録（小松）
 - （2）講演記録（小松）
- 3 職員研修会 3 ページ
 - （1）10月校内研修会（五十嵐）
 - （2）12月校内研修会（五十嵐）
- 4 先進校視察 5 ページ
 - （1）桐蔭学園（井上）
 - （2）新庄北高校最上校（白旗）
 - （3）京都フォーラム（五十嵐）
 - （4）教育改革先取り対応セミナー（教頭）
- 5 試行テスト実施（水口） 2 ページ
 - （1）事前準備
 - （2）実施
 - （3）課題と反省

はじめに

子どもを取り巻く環境は、少子高齢化や核家族化の進行、グローバル化や情報化、A I 技術の進展などにより大きく変化しており、予測困難な時代となっています。

このような時代の変化に対応するため、山形県教育委員会では、時代の要請に的確に応えながら、本県教育の一層の振興を図るため、平成 27 年度から平成 31 年度にかけて総合的かつ計画的に取り組む主要な施策と具体的な取組み等を示した「第 6 次山形県教育振興計画」を策定し、実施しています。本計画では、「人間力に満ちあふれ、山形の未来をひらく人づくり」を基本目標とし、「『いのち』をつなぐ人」、「学び続ける人」、「地域とつながる人」の人間像を目指し、3つの目指す人間像の全体を貫く基本姿勢として、「広い視野と高い志を持って」行動することを求めています。

山形県においては、このことを踏まえ、特別な支援を要する生徒への学習指導の在り方、義務教育段階の学習内容の定着（学び直し）、高等学校基礎学力テスト（仮称）等への対応について取り組むため、平成 27 年度に山形県高等学校基礎学力向上検討委員会を設置し、検討を行ってきました。

そして今回、文部科学省より、高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業の委託を受け、県立庄内総合高等学校を実践校とし、3年間研究をすることになりました。御助言を頂く京都大学の溝上慎一教授をはじめ、県内 5 つの協力校（霞城学園高等学校、左沢高等学校、新庄北高等学校最上校、置賜農業高等学校、鶴岡南高等学校山添校）の先生方、地元中学校（余目中学校、立川中学校）の先生方の御協力を頂き、感謝申し上げます。1 年目としての今年度の取り組みをまとめ、さらによりよい研究となるよう来年度につなげたいと考えております。協力校の先生方には次年度以降も御協力いただきたいと思いますので、よろしくお願いもうしあげますとともに、本事業により本県生徒一人ひとりの基礎学力の定着、高等学校基礎学力テスト（仮称）の制度設計や基礎学力の定着度を把握するためのテスト手法等の開発に資することを御祈念申し上げます。

山形県教育委員会

「実践研究校の指定を受けて」

山形県立庄内総合高等学校長 高 橋 たず子

本校は、昭和2年に余目実科女学校として開校し、創立89周年を迎えました。平成7年に県内初の総合学科が設置され、以来22年間、教職員一丸となって総合学科として特色ある学校づくりに取り組んでまいりました。

地域行事への参加や地域の幼稚園・小学校や老人福祉施設との連携授業、地域に伝わる伝統技術や歴史的文物の教材化、そして専門的技術を持つ地域人材の活用など、地域の教育資源を大いに取り入れた教育活動を展開しています。地域に根差した教育活動と、それによる地域の将来を支える人づくりが、本校総合学科のミッションであると考えております。

近年、生産年齢人口の減少、グローバル化や技術革新の進展、社会や職業の在り方の変化、そして地方創生など、刻々と変わる社会情勢の中で、自立した一人の人間として他者と協働しながら社会の発展に貢献し、未来をきりひらく力を育成することが求められています。本年度、本校は文部科学省より「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」の指定を受けました。これは、2019年から全国で始まる「高等学校基礎学力テスト（仮称）」に対応すべく、基礎学力の定着に向けた指導の在り方、主体的・協働的な学びとなるアクティブ・ラーニング型の学習・指導方法の研究、ICT機器の活用と学習評価の研究、学びなおしと学習習慣の確立を目指した研究であります。

本校では、独自プログラムである「キャリア総合」「卒業研究」等における、3年間の系統的なキャリア教育の実践や科目選択指導を通して、望ましい勤労観・職業観を育成し、「自己の在り方・生き方」について深く自覚させる指導を重ねてきました。また、日々の授業実践にて、様々な地域連携や社会人講師などにより学校内外で、多くの人と接する場面を増やし、課題の解決と発表する機会を随所に設けた指導を展開しております。「体験」と「出会い」の中から、問題解決能力、表現力、コミュニケーション能力等、複雑で日々変化する社会において、それぞれの夢の実現と社会に貢献していく生きる力の伸長を目指してきました。

学校教育の基本は、生徒と教師の信頼関係に基づく授業であり、いかに生徒にとってわかる授業を展開するか、いかに生徒に達成感や自己肯定感を持たせるか、深い学びとなる学習の過程が実現できているかにあると言えます。そういった視点で、これまでの総合学科教育が蓄積してきた教育内容・方法を検証し、成果をとらえる一方で、もう一度今までの指導あるいは学校全体での取り組みを見直すことからスタートしました。

調査研究の初年度は、京都大学高等教育研究開発推進センター教育学研究科教授 溝上慎一先生にご指導をいただき、基礎学力の定着に向けた指導方法の改善を目指して、すべての教科で全教員が公開授業を行い、生徒の主体的・協働的な学びとなるアクティブ・ラーニング型の学習・指導方法の研究に取り組みました。校内研修会やワークショップを重ね、「生徒をどう本気にさせるか（仕掛けの工夫）」「本当に頑張る態度を教師がどう育てていくか」をキーワードに、次年度の調査研究を推進していきたいと考えております。

「磨こう個性を 拓こう未来を」のスクールモットーのもと、「チーム庄総」としてこの文部科学省調査研究事業を学校経営の中核に据え、生徒の秘めたる可能性を最大限に引き出していけるよう、今後も継続して取り組んでいきます。最後に、京都大学教授 溝上慎一先生、県教育委員会、県内の5高校、庄内町の2中学校の検討委員の皆様のご指導に感謝申し上げます。

高校生の基礎学力の定着・向上に向けたアクティブラーニング型授業の実現

溝上 慎一（京都大学教授）

2016 年度 8 月 31 日と 2 月 3 日に、庄内総合高校の 4 つの公開授業（工藤幸子教諭の「E 選択音楽 II」、白旗悠教諭の「歴史探究」、齋藤昭子教諭の「国語総合（古典分野）」、井上鉄也教諭の「数学 I」）を拝見しました。授業を担当された先生方、たいへんおつかれさまでした。

アクティブラーニング型授業の実践に関わらないことですが、授業づくりにあたってまず重要となるのは、学習指導案の作成です。最近、学力の三要素やそれに基づく評価規準がしっかり埋め込まれての授業であるかを見るポイントとなっています。アクティブラーニングは学力の三要素をバランスよく具現化するための学習法ですので、とくに学習指導案は重要となります。

教材観・授業観、内容、評価規準といった点で、授業担当された先生方の学習指導案はしっかり仕上げられており、また当日の授業のなかでの授業デザイン、生徒の活動やフローはそれに従った練られた構造と見えました。私にとっては十分満足するものでありました。

管見の限りですが、庄内総合高校の生徒の基礎学力の定着・向上をはかっていく上で、決定的に問題なのは、教室内での、良い意味での教師の生徒に対するコントロールが甘いことです。あからさまに教師の指示を聞いていない、他の生徒の発表を聞いていない生徒がいます。教師はこれに気づかないのか、気づいていて対処しないのか、わかりませんが、これではアクティブラーニング型で有る無しにかかわらず、基礎学力をつけるための授業実践として不十分です。この部分がしっかり押さえられないと、授業技術や教材研究がいくらすばらしくても無に帰します。

講義一辺倒の授業であれば、寝ているかうつ伏しているかの生徒が、アクティブラーニング型授業ではだらしのない姿となって表れます。それをもってアクティブラーニング型授業は問題だと述べる教師がいますが、間違えていると思います。むしろアクティブラーニング型授業だからこそ、彼らの真の姿を露呈させたと理解すべきです。そこに表れた生徒の、教師の指示を聞いていない、だらっとしているそういう姿こそが彼らの基礎学力の低さの表れなのです。

そのためには、教師には、人（教師）と人（生徒）とがホンキでぶつかっていく相当の気概と覚悟が要ります。ホームルームや学校全体の取り組みもあわせて必要です。大変ですが、この部分に基礎学力定着・向上に向けての本質的な課題の大半があると思います。

私が感心したのは、庄内総合高校の生徒でも、自分が何をやらなければならないかがわかる場面では、しっかり学習や課題に取り組んでいることです。しかし、教師の与える指示や課題が少しでも自分たちの世界と遠くなる場面では、おもしろいほど簡単に集中力が途切れます。教師の質問や与えられる課題を自ら理解しようとする力、途切れそうになった集中力を自ら維持する力、進学校の生徒なら多くの者が持っている力が基礎学力の弱い生徒の多くにはありません。しかし、ここが基礎学力の定着や向上をはかっていく最大のポイントです。問題がわかれば、対処する課題も見えたというものです。頑張っただけだと思います。

そして、ここを乗り越えられれば、あとは、ワークシートの記述内容、理解を定着・発展させるためのふり返りや小テストの実施、家庭学習の時間などを見ていくことになります。次回伺うときには、ここに議論が移れば良いと期待しています。

最後になりますが、事業推進の責任者である庄内総合高校の五十嵐一明教諭、高橋たず子校長、教育庁の小池正春指導主事をはじめ、関係の皆さまに厚く御礼を申し上げます。

1 本校の概要

山形県立庄内総合高等学校は、昭和 2 年山形県余目実科女学校として誕生し、来年度創立 90 周年を迎える。昭和 24 年、町立から県に移管され山形県立余目高等学校となり、その後定時制課程の廃止や家政科の募集停止等を経て、平成 7 年には県内初の単位制・総合学科設置校となった。そして、創立 70 周年を迎えた平成 9 年に、校名を山形県立庄内総合高等学校と改め現在に到っている。

現在、募集定員は総合学科 3 クラス 120 名で、今年度 269 名（男子 113 名、女子 156 名）の生徒が在籍している。生徒は田川地区と飽海地区、そして最北地区の広い範囲から入学しており、地元庄内町を含む東田川郡からの入学者は全体の約 25% である。

部活動は、9 の運動部と 7 の文化部が設置され、熱心に活動が続けている。体操部、陸上部、ウエイトリフティング部がインターハイに出場したり、吹奏楽部や美術部などが各種コンクールや展覧会に出場・出品して入賞する成果を挙げている。中でも昨年創部 50 周年を迎えた体操部は、19 年連続でインターハイ出場を果たし、東北地区の強豪校として県内外にその名を知られている。

進路状況は、就職：進学がほぼ 3：2 の比率となっている。以前は進学者数と就職者数が拮抗していたが、ここ数年の良好な高校新卒の求人状況を反映してか、就職希望者の割合が増加傾向にある。

総合学科である本校教育の柱が、3 年間の系統的なキャリア教育である。健全な勤労観・職業観を備え、主体的に将来の生き方・在り方を選択しその実現に向けて努力する生徒の育成を目標に、3 年間を見通したプログラムを展開している。1 年次「自己理解」、2 年次「自己表現」、3 年次「自己実現」をテーマに、様々な体験活動と多くの発表の機会を盛り込み、コミュニケーション能力の育成に力を入れている。その中では、地元の議会や事業所、専門的な知識や技能を持つ人材等、地域の教育力を積極的に活用する地域と連携した教育活動が行なわれている。

本校はこれまで 1 万人余の卒業生を世に送り出し、その中には地元庄内町を始め田川・飽海地区に居住し、地域の産業・経済・文化を支える担い手として活躍している方も多い。まさに本校は、「地域社会を支え、その発展に貢献する人づくり」を社会的使命とする高校と言える。



2 これまでの本校基礎学力定着に向けた取り組み

(1) 教育課程

本校では平成7年の総合学科への学科改編以来、「幅広い選択科目の中から自分で科目を選択して学ぶ」という総合学科の理念を大切にしている。そのため系列は5系列を設置しているが、科目選択にあたっては系列に関わらず自由な科目選択を行うことを原則としている。

その一方、学力の土台となる国語、数学、英語の3教科に関しては、すべての生徒の中に着実に基礎学力を育むため、共通履修科目を設定している。国語は1年次必修科目の「国語総合」に続き、2・3年次で「現代文B」を共通履修とし全生徒に学習をさせる。同様に、数学では1年次の必修科目「数学Ⅰ」に続き2年次で「数学A」を、英語では1年次の必修科目「コミュニケーション英語Ⅰ」に続き2年次で「英語会話」をそれぞれ共通履修とし、教育課程の中でも基礎学力の定着を図る方向性を明確にしている。

(2) 授業改善

本校では、10月下旬から11月上旬に授業研究週間を設定している。現行の学習指導要領に基づき、授業研究テーマ「コミュニケーション能力の育成と基礎学力の定着」を掲げ、以下の①～③の方策を柱として研究授業を実施してきた。

- ① 基礎基本の定着を図るために、ペアワークやグループワーク等、言語活動を効果的に取り入れ、授業形態の工夫を図る。
- ② ユニバーサルデザインを意識し、様々な生徒の実情に合わせた学習活動を図る。
- ③ 繰り返しの学習だけでなく、活用する場面を設けるとともに、定着度の把握と検証等の機会を設ける。

実施後は教科合同の合評会を行い、研究授業の成果と課題を共有し授業の改善に活用している。さらに、生徒対象に年間2回の「授業改善のためのアンケート」を実施している。生徒が「その授業に対してどのように感じ評価しているか」を把握し、授業改善のきっかけとすることを目的に行うもので、今年度は7月と12月に実施した。アンケート実施後、各授業担当者は明らかになった課題に対して改善案を考え、さらにそれを報告書の形で職員間で共有し、教員個々の枠を越えた教員全体の授業改善につながるよう工夫している。

(3) 授業・課題・試験

新入生には、入学式前のオリエンテーションで中学校までの学習内容を復習する課題を配付し取り組ませる。そして、入学後に課題試験を実施し、義務教育段階での学習内容の定着度を測定する。各教科の授業がスタートしてからは、その結果を踏まえ、義務教育段階の復習（学び直し）から入り順次高校段階の内容へと進んでいく。

また、年次を問わず多くの教科・科目の授業で、授業の始めまたは終わりに小テストを実施し、前時の授業内容を確認したりその時間で学んだ内容を整理したりしている。

さらに、全年次を対象に長期休業中の課題として、義務教育及び高校1年生レベルの国語・社会・数学・理科・英語、そして一般常識問題を課し、休み明けに課題試験を実施する。本校生の中には卒業後すぐ就職する者が多く、また科目選択の状況によっては3年次で数学や英語を履修しない者もいることから、実社会で求められる基礎学力と社会常識を身につけさせることをねらいとして行われてきた。

(4) 日課の変更

基礎学力の定着度を上げるため、各教科指導だけでなく、朝学習、朝読書等の取り組みを行うこととし、朝のSHRを5分から10分に延長した。

(5) 年次等における取組み

各年次では、定期試験に向けた学力の向上を目的に、試験前の部活動停止期間に学習会を実施している。担任が個々の生徒の学習状況を把握し、必要と思われる生徒を指名し参加を促す場合も多く、成績不振者の底上げにも効果を発揮している。また、長期休業中には、休業中の課題への取組み状況を確認し、休み明けの課題試験に向けた準備を促すための学習会も実施する。

日常の取組みとして、朝のSHRの時間を活用した「朝学習」と「朝読書」がある。年次担任団で、その時々の生徒の状況を見ながら計算や漢字等のドリルを準備し取り組ませている。

(6) キャリア学習（キャリア総合）

総合学科である本校では、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育むキャリア教育を教育活動の柱に据えている。3年間を見通したプログラムに従い、「体験」と「出会い」を重視し、探究と自己実現に向けた取組みを達成させることを掲げ進んできた。その学習活動の中で、将来の「在り方・生き方」に目を向けることの大切さと、将来の自己実現には基礎学力の充実が不可欠であることを繰り返し指導している。

そして、本校のキャリア学習では、独自に作成した「キャリア日誌」を活用している。これは各年次ごとに作成し、生徒が日々の家庭学習や生活の状況、定期試験ごとの学習成績や振り返り等を記録するものである。定期的に担任団が点検し、コメントを記入して返却する。生徒の状況を把握しながらアドバイスを与えるなど、生徒と教員間のコミュニケーションを図る有効なツールとなっている。

また、全校的な取組みとして教務課主催の「学力クラスマッチ」がある。これは、全年次の生徒が基礎レベルの共通テストに取り組み、その成績をクラスごとに集計し、成績上位のクラスを表彰するものである。クラスの団結を育みながら同時に基礎学力の定着を目指し、キャリア総合やLHRの時間を利用して6月と2月の年2回実施してきた。

(7) 地域の教育資源の活用

本校教育の特色の一つに、地域連携に基づく教育活動があげられる。先述のキャリア学習に加え、地域の保育園・幼稚園や福祉施設、短期大学等で実習を体験したり、地域の伝統技能を専門家から学ぶ等、様々な教科・科目の中で地域の教育力を活用した授業が行われている。



1 現状と課題

(1) 現状

①学習指導

総合学科の基本は「入学者個人々の教育要求に対して柔軟な対応が期待でき、生徒達は高校入学後に興味や関心、将来の進路などに応じて多様な科目の選択履修ができる」ことにあると考える。そこで、本校では系列の縛りを設けず、生徒の興味・関心に沿って系列の枠を超えた自由な選択ができるよう配慮しており、生徒の多様な興味・関心に応えるため、5つの系列に総合選択科目及び自由選択科目合わせて約100科目を設置している。また、地域の教育力を積極的に活用するため、農業や手芸、フランス料理など専門的技能を持つワンポイント講師（期間限定非常勤講師）による授業を、年間90時間程度実施している。

さらに、科目選択の幅を広げ年次の枠を超えた学びあいを進めるために、理科や地歴公民、芸術や外国語等で、2年次と3年次生による異年次履修の授業も展開している。

一方、独自プログラムである「キャリア総合」を核として、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てるキャリア教育を推進している。1年次生は「キャリア総合1」として「産業社会と人間」を2単位、2年次生は「キャリア総合2」として「総合的な学習の時間」を2単位、3年次生は「キャリア総合3」として「総合的な学習の時間」1単位及び「卒業研究」1単位をそれぞれ履修している。

3年間を見通した一貫性のあるプログラムのもと、インターンシップや社会人講話、各種発表活動など、生徒達は学校内外での様々な体験的学習を通して、将来の「在り方・生き方」に目を向け、同時にプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力等の生きる力を身につけている。

②進路指導

進路希望は就職から進学まで幅広く、その内容も進学であれば四年制大学から専門学校、就職も公務員から民間企業までと実に多種多様である。それが総合学科の特色の一つと捉え、そのような様々な生徒の希望と保護者の期待に応えるべく、本校独自の「キャリア総合」と進路課による各種指導を連携させながら進路指導の充実に努めている。

3年次生の「キャリア総合3」では、希望進路に応じて生徒を1グループ10名前後の小グループ（キャリアクラス）に分け、それぞれ担当者（キャリア担任）を配置し、クラス担任と連携を取りながらキャリアガイダンスを行っている。また、3年次生の面接指導や小論文・作文指導等については、PTAの協力も仰ぎながら全教員で当たっている。

本校生の進路状況については、以前は進学者と就職者の割合がほぼ拮抗していたものの、ここ数年は好調な高卒就職事情を反映し、およそ就職：進学＝3：2で推移している。

平成27年度卒業生の進路状況は、就職者79名（内訳：県内地域内60名、県外16名、公務員3名）、進学28名（内訳：4年制大学3名、短期大学3名、大学校等2名、

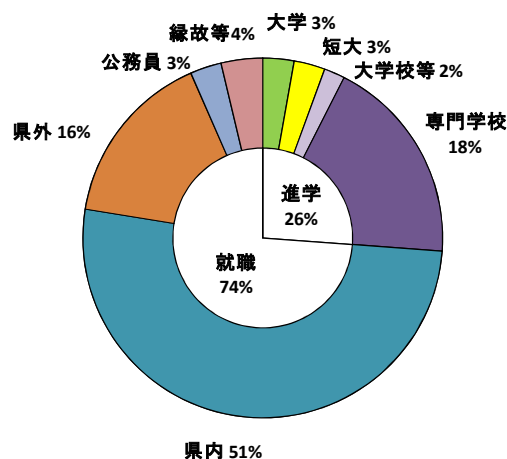


図1 27年度卒業生の進路(107名)

専門学校20名)となっており、進路の層が幅広く、基礎学力テスト(試行テスト)の実施や効果測定による授業改善の研究に適しているといえる。

③生徒指導

本年度、生徒保健課の重点目標の一つに「自他を尊重する心(いじめを絶対許さない)や社会のルール・マナー・礼節(凡事徹底)を重んじる態度を教え身につけさせる」を掲げ、何か問題が起きてから対応する指導ではなく、日頃から教職員と生徒の信頼関係をしっかり構築し、普段の学校生活の中で「自分を律する」力を育んでいくような生徒指導に重きを置いて取り組んでいる。特に生徒との対話を重視し、5月に「総合面談」期間を設定し、会議や研修会の精選と時間短縮を図るなど、生徒と教職員が向き合う時間の確保に努め、十分なコミュニケーションが取れるよう学校全体として配慮をしている。

④健康・安全指導

特別な支援を要する生徒が、グレーゾーンの生徒も含めて毎年度複数名おり、それ以外にも、生活指導や家庭生活、学習・友人関係などの問題を抱え、個別のサポートを必要とする生徒が在籍している。そうした実態に対応するため、年3回SPOON委員会を開催し、組織として情報共有と対応策の検討を行っている。また、必要に応じて、養護教諭、保健主事、年次主任、当該担任や部顧問等によるケース会議を開き、時期を捉えて必要な指導ができるよう努力をしている。

さらに、具体的かつ効果的な支援のためには専門的な観点からの指導も不可欠である。そこで、県の予算措置とPTAの協力により、年間20回学校カウンセラーによるカウンセリングの機会を設け、多数の生徒、保護者、教職員が利用している。

⑤部活動の指導

1年次生・2年次生は部活動全員加入、3年次生は自主加入としているが、運動部はもちろん、文化部も意欲的に活動している。昨年度は体操部と陸上部が、今年度は体操部と陸上部、そしてウエイトリフティング部が全国高校総体の出場権を獲得した。体操部は男子団体で19年連続の出場となる。

(2) 課 題

①学習指導

- (ア) 授業を基本とした基礎基本の定着と向上、確かな学力の育成
- (イ) 生徒の希望を叶え学ぶ意欲を育むため、時間割や群の数、履修条件等の見直し
- (ウ) 「キャリア教育」の視点によるコミュニケーション能力と自ら考え実行する力を養い、自分の在り方・生き方を探究する資質や能力の育成
- (エ) 学習指導要領に基づく分かりやすく活用しやすいシラバスの作成と授業改善

②進路指導

- (ア) 多様な生徒の学力保障。特に大学進学希望者の大学入学後に必要な学力の定着
- (イ) 公務員、医療系進学者の模試データの蓄積
- (ウ) 本校(総合学科)の進路指導の評価

③生徒指導

- (ア) 基本的な生活習慣の確立
- (イ) あいさつなど「凡事徹底」をレベルアップさせるため全校的な取組
- (ウ) 「いじめは起こるもの」という認識に立った迅速ないじめへの対応

④健康・安全指導

- (ア) 特別支援が必要な生徒への対応
- (イ) カウンセリング体制の一層の充実
- (ウ) 養護教諭の多忙化解消
- (エ) 校舎の危険個所の改修

⑤部活動の指導

- (ア) 生徒数の減少に伴い、年度によっては単独でチームが組めず、他校と合同チームを組まないと大会に参加できないケースが生じている。部の統廃合を含めた部活動の在り方についての検討・見直し
- (イ) 技術指導ができる教員の育成・確保
- (ウ) 活動環境・施設の確保。特に冬期間の練習場所の確保
- (エ) 未加入者、退部者に対する多方面からの継続的な指導



2 事業概要

- (1) 「山形県高等学校基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業検討会議」
→「山形アクティブ会」の設置 ※実践研究校関係者＋有識者＋平成27年度までの
山形県基礎学力向上検討委員会の委員＋地元中学校関係者で構成

- ①基礎学力向上に係る指導方法、カリキュラムマネジメントの研究
- ②試行テストの結果を活用した基礎学力向上の研究
- ③特別な支援を要する生徒への指導方法の研究
- ④C B Tによる試行テストへの対応
- ⑤研究成果の普及

3 調査の具体的な内容・方法

【実践研究校における研究・実践内容】

～カリキュラム・マネジメント（PDCAサイクル）による指導改善～

- 校内学習指導改善推進委員会の設置
 - ・管理職、国数英の3教科主任、進路課長、教務課（委員会の事務局を兼ねる）を中心とした庄総アクティブ委員会（総称）を設置し、教務課5人が事務局として毎週水曜日4校時に事務局会を開催し計画の立案等の業務を行っている。
- アクティブ・ラーニングの推進（学力の3要素が反映された授業デザイン）
 - ・全教員による基礎学力定着を目指したAL型授業の実施と研究の推進。（実施詳細については後述）
- ICT機器の活用と学習評価の研究
 - ・ICT活用の研修会に参加、校内研修会の実施。タブレット等ICT機器導入。
- 基礎学力向上に係る視察研修および校内指導改善教員研修会の開催
 - ・基礎学力向上先進校の視察、アクティブラーニング研修会の視察を実施。また、京都大学の溝上慎一教授を招いての教員研修会を2回実施。

【チーム庄総】の取組み

～ 授業改善（ステップ1） ～

- 例年、授業研究月間として10月に教科毎の研究授業を実施、授業アンケートの実施、職員研修会など授業改善についての取組みがなされているが、毎年年度末の反省として授業改善についての課題が議論となっている。本校職員は自分の教科の授業についての改善意識があるけれども、日常的に授業について議論をする時間を取れないでいる。学校全体で授業について語り合い、生徒の学力向上に結び付くような授業改善の取組みにするにはどうしたらいいかを、この事業を機会に具体的な取り組みにしていきたい。

＜取り組み内容と方法＞

（1）全教員参加型の研究授業の実施

- ・後期にあたる10月から2月を4期に分け、毎回6グループから1人ずつ研究授業者を出してもらい計24回の授業参観を実施。第2期が終わった時点で、中間反省の趣旨で職員研修会を開催し、第3・4期の研究授業に生かすことができたのではないかとと思われる。

（2）チームでの授業研究

- ・1グループ4～5人の教科の枠を超えたチーム編成を行い、チーム名とチームリーダーを決め、そのチームで授業改善に取り組んだ。各グループで研究授業を終わるたびに合評会を開催し授業についての研究討議を行い、報告書を作成するところまでをチームリーダーの責任でチーム毎に行っている。

（3）基礎学力定着を目指したAL型授業の実施と研究の推進

- ・事業の図書費で購入した図書を研究材料にして、アクティブラーニング型授業の研究を行い毎回の研究授業や合評会に活かしている姿が見られるようになってきている。

（4）「学習デザインシート」「研究授業公開シート」の作成と活用

- ・本事業の助言者である京都大学の溝上慎一先生から紹介していただいた「学習デザインシート」（指導案）を毎回の研究授業で使用。授業参観者用に本校独自に作成した「研究授業公開シート」を授業者に作成してもらい、参観後にコメントを書いて授業者に提出する。合評会に参加できない他のチームのメンバーの感想も報告書に反映されることになる。

＜「授業改善」の取組みを通じての変容＞（アンケート調査）

- 1) 教員
- | | |
|---|------|
| 1. 基礎学力の定着を意識した取組みをしている。 | 100% |
| 2. 「AL型授業」を意識した取組みをしている。 | 89% |
| 3. 授業改善の取組み（全員研究授業）をしているが、
自分自身の授業において変容がある。 | 32% |
| 4. 自身の授業改善を通じて、生徒に変容がある。 | 42% |
| 5. 本校の生徒は「アクティブラーナー」になろうとしている。
少しはある：32% あまりない：37% 全然ない：26% まだ：5% | |
- 2) 生徒 A（よく当てはまる） B（やや当てはまる） C（あまり当てはまらない）
D（全く当てはまらない） 未（未回答）

・本校の先生方は授業の改善のために一生懸命 取り組んである。

1年次：	A	30.0%	B	40.2%	C	18.1%	D	11.7%
2年次：	A	26.8%	B	47.9%	C	16.9%	D	8.4%
3年次：	A	19.8%	B	63.5%	C	16.6%	D	
全体：	A	25.4%	B	51.1%	C	16.9%	D	6.6%

- 3) 保護者 A（よく当てはまる） B（やや当てはまる） C（あまり当てはまらない）
D（全く当てはまらない） 未（未回答）

・本校は授業の改善に熱心に取り組んである。

1年次：	A	29.2%	B	51.4%	C	18.1%	D	1.3%
2年次：	A	26.9%	B	55.8%	C	17.3%	D	
3年次：	A	17.5%	B	70.0%	C	11.3%	D	1.2%
全体：	A	24.0%	B	59.8%	C	14.7%	D	1.5%

＜評価と課題＞

- 1) 全員参加型の授業研究を始めるにあたって先生方に抵抗感があつたことは否めないが、研究授業を進めていくにつれ、AL関連図書の貸し出しが増えたり、職員室での授業についてのコミュニケーションも盛んになってきた。教科の枠を超えたチーム編成をして実施してきたせいか、教科としての基礎学力定着に関する議論という点では不十分だった。
- 2) チームによって取組みに温度差はあつたものの、各チームともチームリーダーを中心にしてアクティブに授業改善に取り組んでいた。次年度別のチーム編成を検討したい。
- 3) 上記のアンケート結果から、職員のこの取組み前と実施後では「基礎学力定着」「アクティブラーニング型授業」そして「授業改善」に対する意識は変化している。また生徒、保護者のアンケート調査の結果からも、学校や教師の姿勢に対してよい評価をしていることは、実践校としての取組みとして一定の評価ができるのではと思っている。

＜終わりに＞

・本格的に全員参加型の研究授業の実施による授業改善に取り組み始めたのが後期からだったにもかかわらず、京都大学溝上慎一先生の愛情溢れるご指導のもと、県教育委員会はじめ本校職員の協力を得て取り組むことができましたことに感謝申し上げます。教師がどう教えるかではなく、生徒がどう学ぶか。授業が変われば学校が変わるということを信じ、本事業をさらに発展させていきたいと考えています。（アクティブ事務局担当）

5. 校内委員会役割・組織図

校内学習指導改善推進委員会（庄総アクティブ委員会）

1. 校内体制（全職員参加体制）

（１）教員一人ひとりが、各教科の基礎学力の定着に向けた授業改善とそれに伴うアクティブラーニング及び学習評価の研究・実践を行う。

（２）分掌に分かれた役割分担

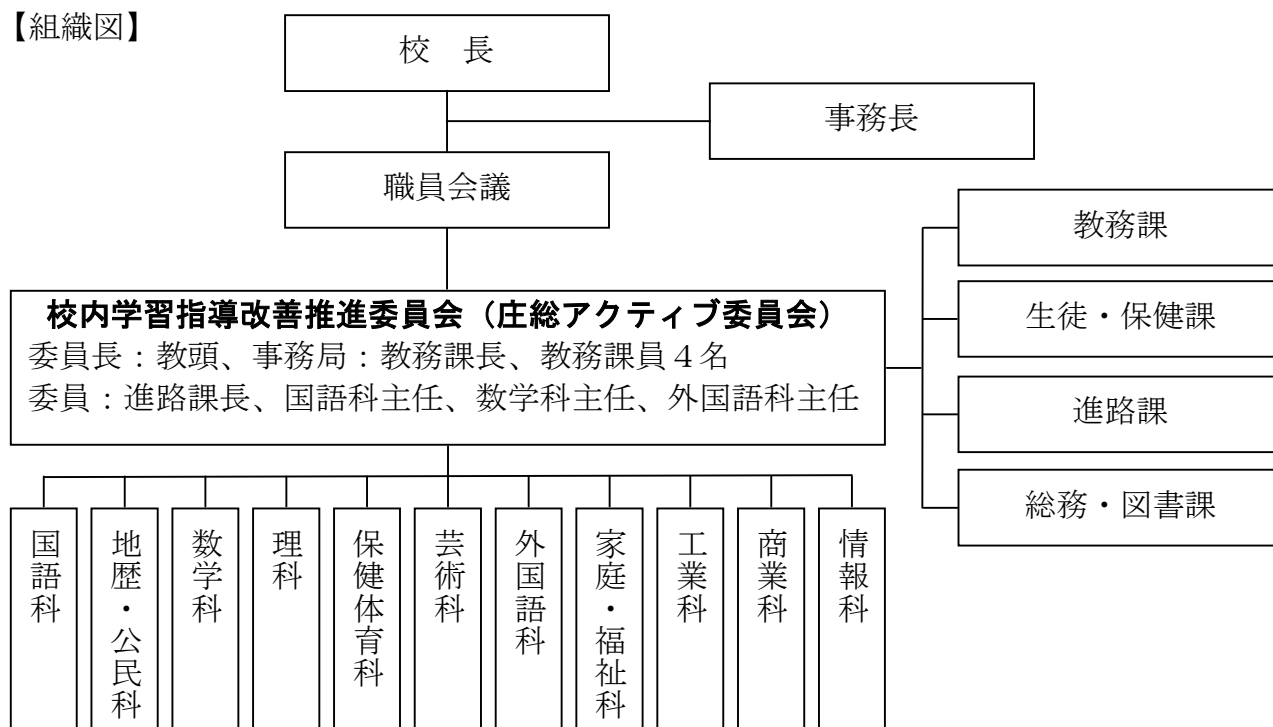
- ① 総務課：広報活動（HP、マスコミなど）、研究報告書作成用記録
- ② 進路課：効果測定（業者との連携）、朝学習の研究、大学及び企業連携
- ③ 生徒保健課：実態調査、特別支援、地域連携
- ④ 教務課：事務局、AL 推進、授業改善、ICT、評価、基礎学力テスト関連

2. 推進委員（＋事務長）

委員長	国語主	数学主	英語主	進路課	教務課	教務課	教務課	教務課	事務局
教頭	齋藤昭	井上	菅原和	小松原	本間	小松	白旗	水口	五十嵐

- （１）渉外（文部科学省・県教育委員会）：教頭、五十嵐（教務課長）
- （２）予算執行（会計）：事務長、教頭
- （３）「調査研究事業検討会議」準備・運営：全員
- （４）委員会開催準備、記録など：五十嵐、小松、
- （５）研修会開催、準備、運営：本間、五十嵐
- （６）授業改善、AL 推進、交流授業、学び直し研究：小松、白旗、五十嵐
- （７）ICT 活用：本間、水口
- （８）研究効果測定、実態調査：小松原（進路課長）、井上
- （９）学習評価：齋藤昭、菅原和
- （１０）朝学習：菅原和、齋藤昭
- （１１）基礎学力テスト（試行テスト）実施体制確立と活用検討：総括・五十嵐
 - ・問題収集、作成担当、結果活用：齋藤昭、井上、菅原和
 - ・環境整備：水口、本間、・実施、結果活用：小松原、白旗、各年次担任団
- （１２）事務局会議（毎週水曜日 4 校時、応接室）：教務課 5 人

【組織図】



第1回「山形県高等学校基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業検討会議」

平成28年8月31日（水）

会場：研究授業…庄内総合高等学校

検討会議……余目第三公民館

（1）研究授業、検討会議の記録

◆研究授業 【テーマ：アクティブラーニング型授業の実践】

授業科目	対象生徒	授業者	教室
国語総合（古典）	1年1組 32名	教諭 齋藤 昭子	1年1組HR
歴史探究	3年選択H群 21名	教諭 白旗 悠	情報処理室
音楽Ⅱ	2年選択E群 23名 3年選択H群 3名	教諭 工藤 幸子	音楽室



◆検討会議より

- ①教育委員会挨拶 【高校教育課長 津田 浩】
- ②研究指定校長挨拶【庄内総合高等学校長 高橋たず子】
- ③自己紹介
- ④事業説明【高校教育課指導主事 小池正春】
- ⑤研究指定校より【庄内総合高等学校 教諭 五十嵐一明】
- ⑥参加者より、研究授業に対する感想並びに各校現状報告



参加校	研究授業に対する感想並びに各校現状報告
立川中学校	全体的に生徒が主体となって自ら学び考える授業改善に努めている。国語の表現分野、数学の図形問題を苦手とする生徒が多く、対策を立てて取り組んでいる。数学はT Tで実施。朝学習・朝読書も設定。家庭学習の仕方、内容などが検討課題である。
余目中学校	先生方が非常に丁寧に授業をしてくださっている印象を受けた。また他と関わることを苦手とする生徒への声掛け、配慮が行き届いていると感じた。 中学校では小学校段階の学び直しで苦勞している。朝読書をベースにしながら、基礎力テストも実施している。数学はT Tで実施。

霞城学園高校	生徒たちが安心して話し合いができていた。生徒同士、教師と生徒の信頼関係ができていると感じた。霞城では様々な取り組みを実施しているが、教師も生徒も新しい取り組みに対する戸惑いがあり、どうモチベーションを上げていくか思案中である。
左沢高校	今年度、総合学科(普通科・商業科・農業科)の完成年度。 「学び直し」として、1年~3年までベネッセのマナトレを朝学習で取り入れている。まだまだ取り組ませ方の工夫・改善が必要だと感じている。朝読書も実施している。
新庄北最上校	授業を参観し、各教科ともいろいろ工夫がされていると感じた。本校は文科省の指定を受けて2年目である。「リラーニング」ではベネッセのマナトレを使用して国語と数学の学び直しを実施。昨年度まで年間4回の実施だったものを、今年度より通年実施に変更。生徒の理解力が向上していることを教師のみならず、生徒自身も感じているようだ。「ライフスキル」は特別支援が必要な生徒を対象として実施している。
置賜農業高校	学習環境が整備されており、掲示物の見やすい工夫や教室の整理整頓ができている学校だと感じた。 「マイサポ」に取り組んで4年。月~金の毎朝10分で実施。説明⇒取り組み⇒テストのサイクルで行っている。6割の中間層の生徒からは高評価を得ているが、上位層・下位層の生徒からは得られていないため、今後どうこれらの層の生徒をサポートしていくかが課題である。
鶴岡南高校山添高	分校となって3年目。平成22年より1年次に「学校設定ベーシック」を2単位で設定。平成23年には特別支援指定校となり、支援員とともに生徒の指導にあたっている。

⑦指導・助言

講 師：溝上 慎一教授【京都大学】

ワークを活用しての授業で、授業の最後に「話し合いを通して学んだこと」について記入する欄が設けてあったのが良かった。教師が発言する時には必ず注目させる、などの生徒をいい意味で支配することもある。

授業では生徒に「発表する」ことの意味づけを、発表する側の生徒にも聞く側の生徒にも意識させる必要がある。一人ひとりが緊張感を持って臨む姿勢を養わせたい。

1年生の時の授業に臨む姿勢がそのまま3年生まで続くものである。「この学校における学びはこうだ。」と生徒に学びの姿勢を1年生の初期段階で徹底して持たせることが重要である。



(2) 講 演 《ワークショップ》

講 師：溝上 慎一教授【京都大学】

◆指導案について

生徒に何の力を身につけさせたいのか、またどこに向かって進めているのかがわかる指導案づくりを。表記は全国版に合わせる。

◆基礎学力定着とアクティブラーニングについて

「アクティブラーニングをすることで生徒の基礎学力が身に着く」と安易に考えるべきではない。生徒自身が記憶しようという姿勢、点数が取れないと悔しいと感じる姿勢が成り立たないと、いくらアクティブラーニングを取り入れても基礎学力の定着には繋がらない。また、生徒に達成感、自己肯定感を持たせる意味で、生徒をどう本気にさせるかの仕掛けの工夫、「本当に頑張る態度」を教師が本気になってどう育てていくかが鍵である。

子どもたちの多くが地元志向というか、自身の地域から出て行こうとしない傾向が強い。地域を超え、未知の世界に目を向ける姿勢、知識を得て新たに人と繋がる楽しさを見出す視点をどう育てるか。いったん外に出て地域を見る目を育てることも大切である。

人の話を聞く姿勢を育てる意味でも、講義を入れながらの授業形態が望ましい。生徒たちが将来、諸問題に対して考える力が身についていること、また他者との議論ができる姿勢は大事である。授業は、「個⇒協働⇒個」のサイクルで、ワークシート等を活用しながら行くと、生徒が受け身ではなく、自ら思考し、自ら授業を創っていかうとする姿勢が育つ。発表に関しては「人に聴いてもらえるプレゼンテーション」を意識させる。最終的に発表する場があること、発表者も乱数で決めるなどの進め方をあらかじめ提示することで、グループ学習（協働学習）も他人任せではなく、自分から取り組もうとする姿勢が出てくる

また授業だけでなく、日々の学校生活においてもアクティブラーニングを取り入れていくべきである。（例えば日直に1分スピーチをさせるなど、HRやSHRを活用する。）人と人とがぶつかり合うことで新しい視点を見出し、社会に対応できる力を身につけさせることがアクティブラーニングの持つ効果である。



平成28年度 高校生の基礎学力定着に向けた学習改善のための 調査研究事業 第2回調査研究事業検討会議に参加 して

庄内町立立川中学校

武田 明也

今回、「高校生の基礎学力定着に向けた学習改善のための調査研究事業検討会議」に参加させていただき、高校の学習の様子を知り、またアクティブラーニング型授業の考え方などを学ばせてもらいました。感じたことを以下に列挙させていただきます。

- 他校（余目中学校）や、高校での学習面を中心とした現状・成果・課題などを知ることができて、たいへん有効でした。
- 京都大学：溝上慎一教授による講義が、たいへんわかりやすく、勉強になりました。アクティブラーニング（AL）についての考え方や、授業での注意点、その意義など、ポイントを絞った内容で、AL型授業を構成する上で、大いに参考になりました。
- 溝上教授が教育顧問をされている桐蔭学園のホームページ（ALの映像・インタビュー）も、授業改善の上で、たいへん勉強になりました。「学びのツール」という所に載っていた「まなボード」は、グループワーク（話し合い活動）やプレゼンテーションに有効な物だと感じました。
- ALについては、本校でも実践している教科があります（今年度は、国語・理科・英語・保健体育で実践した）。私は国語を受け持っていますが、毎時間となると難しかったのですが、単元によってはアクティブラーニング型で授業を構成し、実践しました。教え合い、お互いに学び合おうとする姿が見られました。

高校側が「授業改善」に取り組んでいることを知り、中学校側としても、AL型授業をさらに推進していきたいと考えているところです。思考力・判断力・表現力を身に付け、磨き、社会で生きるための力を積ませたいと思います。今後も、継続的に研鑽を積んでいきます。ご指導ありがとうございました。

基礎学力定着に向けた学習改善の実践報告と本事業の感想

庄内町立余目中学校 教諭 風間 成彦

1. 余目中学校における基礎学力定着に向けた学習改善の取り組み

(1) 学校研究を通じた取り組み

本校の課題は、発達障害を抱える（その疑いが考えられる）生徒や様々な生育環境の中で悩み苦しむ生徒への学習指導である。研究主題は『すべての生徒がいきいきと学ぶ授業をめざして』と設定した。研究方法を①学習内容の焦点化（課題とまとめを一致させる授業）②授業のUD化③学び合い活動推進（教師が一方向的に伝える授業→生徒同士が伝え合い高め合う活動を仕組む）④『生き生きと学ぶ生徒』を育てる土台としての学年・学級経営（温かい関わり合いを育てる道徳・特別活動）とした。

(2) 各学年での基礎定着をめざした取り組み

基礎力学習（国語、数学、英語）とテスト（合格まで）を学期の中間頃に実施。定期テスト後に基礎力テスト（5教科定期テストから出題）等を実施している。

(3) 特別支援教育委員会の組織的機能

発達障害を抱える（その疑いが考えられる）生徒や個別に配慮を要する生徒のピックアップと優先順等を特別支援教育委員会で検討し、個別支援計画に基づき対応する。また変容による見直しを定期的に行う。

(4) 成果と課題

(1)～(3)の取り組みを通して一定の成果（H28年度余目中学校公開研より）を上げた。次年度への課題は、各教科で探究型授業（アクティブラーニング）を採り入れることである。探究型授業実施に向けた単元計画の見直しから着手する予定。

2. 本事業の感想

高校の基礎学力定着不足は中学校での基礎学力定着不足であり、中学校の基礎学力不足は小学校における基礎学力不足に起因する。しかし、中学校としてできる限り基礎学力定着を図る手立てを講じなければならない。カリキュラムマネジメントによる授業改善の必要性を本校で周知させていきたい。

溝上先生の講義では、アクティブラーニングは授業者と学習者の規律の確立が大前提であり、覚える力がアクティブラーニングの基礎になり、覚えることを小テストで定着させる→小テスト結果がよくないときには悔しがる（本気にさせる）学ぶ姿勢が重要であることを学ばせていただいた。この講義によって具体的なアクティブラーニングのイメージを持つことができたので、対話的な学びは、形式的な学び合い活動になっては意味がないことを念頭におき、本校における探究型授業（アクティブラーニング）の実践に取り組んでいきたいと感じた。

子

(1) 今年度の成果

① 職員研修会

導主事

講演を

大学大

だき、

演をし

8 月 2 日（火）に、定通合同の職員研修会を実施した。山形県教育センターの山科勝指から「探求型学習の授業づくりの基礎～生徒の基礎学力向上を目指して～」と題して、講演をいただいた。また、12 月 27 日（火）に、定時制の職員研修会を開催した。山形学院教育実践研究科教授の三浦登志一氏より、校内研究授業合評会に関する助言をいただき、「生徒の多様性に対する学習支援のあり方——探究型学習の視点から——」と題して、講演をいただいた。

② セミナーへの参加

校外の

「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」における基礎学力向上委員会の委員が、セミナーに参加し、アクティブラーニングに関する研修を行った。
7 月 29 日（金） 於：仙台市
高校教員対象アクティブラーニングセミナー
「～東北の教育を考える～生徒が能動的に学習する真の『教育』を目指して」
8 月 6 日（土）～7 日（日） 於：京都市
高校教育フォーラム 2016

③ 試験前学習会

学習質問

定期試験前は生徒の職員室への入室が禁止となるため、昨年度に引き続き、会議室を学習会場として確保した。（年間 5 回、約 25 日）

④ 総合的な学習の時間発表会

らが取

本校における総合学習を探究型学習の実践と考え、その成果を発表する場として生徒自らが取り組む発表会を部ごとに計画し、11 月 17 日（木）LHR の時間に実施した。

⑤ 授業改善

し、合

「探究型学習を取り入れた指導実践の研究」をテーマに、8 教科で校内研究授業を実施し、合評会を行った。

⑥ 外部人材キャリアカウンセラーの活用

生徒対象のソーシャルスキル講座を、午前午後とも13回実施した。また、職員対象の研修会を4回実施した。

⑦ 基礎学力養成

Ⅲ部で基礎学力養成教材「たいよう」を、年間16回実施した。

(2) 課題

本校には、特別な支援を必要とする多様な生徒が在籍しており、授業において配慮を要する生徒が

多数いる。それらの生徒に対応しつつ、アクティブラーニング（探究型学習）を行うことは難しい

面がある。本校にあったアクティブラーニング（探究型学習）の形を探っていく必要がある。

第2回「山形県高等学校基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業検討会議」

平成29年2月3日（金）

会場：研究授業…庄内総合高等学校

検討会議……余目第三公民館

（1）研究授業・検討会議の記録

◆研究授業【アクティブラーニング型授業の実践】

授業科目	対象生徒	授業者	教室
数学Ⅰ	1年3組 15名	教諭 井上 鉄也	3年2組

◆検討会議

- ①教育委員会挨拶 【高校教育課主任指導主事 齋藤祐一】
- ②研究指定校校長挨拶【庄内総合高等学校長 高橋たず子】
- ③事業のまとめと来年度について【高校教育課主任主事 小池正春】
- ④中間報告及び今後の予定 【庄内総合高等学校 教諭 五十嵐一明】

月日	校内の取り組み・事業など
7月4日 ～7月15日	研究授業週間 テーマ「コミュニケーション能力の育成と基礎学力の定着」
8月30日	職員研修会（講師：溝上 慎一 京都大学教授）
8月31日	第1回山形県高等学校 基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業検討会議
10月5日	中間反省会（校内研修会） 教員を教科の枠を超えた6班に編成し、4期に分けて、全員が研究授業を実施することに決定。 研究授業 第1期 10月31日(月)～11月7日(月) 第2期 11月14日(月)～11月18日(金) 第3期 12月12日(月)～1月16日(月) 第4期 1月23日(月)～2月3日(金)
12月9日	中間授業研修会 テーマ「生徒に基礎学力を身につけさせるために必要な取り組みについて」 ① 具体的にどのような取り組みをすべきと考えるか。 ② ①で挙げた取り組みをどのように実践したらよいと考えるか。イーゼルパッドを使用しながら、与えられたテーマについて各班で意見を出し合い、話し合いの結果を発表し合うという形式で実施。
12月22日	タブレット研修会
1月16日 ～1月26日	第1回高等学校基礎学力テスト(仮称)試行調査 CBT(Computer Based Test) RST(Reading Skill Test) 英語スピーキングテスト アンケート調査

《今後の予定：平成 29 年度》

1. 組織的な授業改善の推進
2. 先進校及び実践校視察・研修
3. アクティブラーニング、I C Tの更なる研究と実践
4. カリキュラムマネジメントの研究
5. 中高の連携と効果測定(ベネッセとの連携)の充実



(2) 講 演

講 師：溝上 慎一 教授【京都大学】

◆研究授業に関して

指導案がアクティブラーニングのポイントを捉えたものになっており、デザインされた指導案である。授業内で使用しているタイマーだが、若干小さい。生徒に時間を意識させる意味ではもっと目につきやすい大きさのもの、全員が時間を共有できるものがよい。また、生徒が全員参加しているかを教師が意識すること。参加していない生徒を決して見逃さないことが大事である。

◆アクティブラーニングを進めるうえで

ペアワークをさせるからには「形」を整える。何をさせるためのペアワークなのか、ペアワークの意味、活動に「魂」を入れていくための方法を熟考すること。グループ活動も同様である。生徒全員が授業に参加する「形」をつくること。出来ていない生徒をそのまま放置しない。教師が良くも悪くも「鍵」となる生徒を把握しておくことが重要である。学んだ内容に関しては次の授業時に小テストで振り返るなどすると効果的である。

生徒に発表させるときには「誰に向かって発表するのか」を意識させる。声の大きさ、声の抑揚、目線など、「発表とは何か」を理解させることが大事である。また発表する側だけではなく、聞く側の「形（＝傾聴力）」も指導して身につけさせていく必要がある。

《ペアワーク、ディスカッションの原則》

・お互いに教え合う

・お互いの顔、目を見る

・スマイル

・適度にうなづく

「わかって」「聞こう」「学ぼう」「参加しよう」とする気持ちをどう生徒に身につけさせるかについて、教師が真剣に向き合う姿勢を持つこと。将来、様々な人と議論を交わすことで思考を深めていける生徒を育てていく。

◆質疑・応答（A：溝上教授）

Q：グループ活動でなかなか輪に入れない生徒、真面目に取り組んではいるもののリアクションがないという生徒。このような生徒にどう声掛けや働きかけをしていくべきか。

A：同じ班の人がその子の話に耳を傾けられるように教師側から働きかける。傾聴の姿勢を授業だけでなく、HRや学校行事、キャリア学習等の中で身につけさせていくことを教師が意識すること。

Q：課題に対してできる教師とできない教師が混在する（取り組みに温度差がある）なかで、学校全体で取り組ませていくにはどうすればよいか。

A：学校として、まずは「形」から入ってもらう。繰り返す中で教師の中に「気づき」が生じていくはず。まずは職員の1/3程度でコアチームを結成し、そのチームを中心に進めていく。その影響を受けた次のチームを育てていく、という具合に進めてはどうか。例えば、桐蔭では学年主任・教科統轄主任を中心にしたコアチームを結成し、そこで決定した内容が全体に下りていくというスタイルを作ろうとしているところである。

Q：授業で取り組む部分とそれ以外で取り組む部分（外化につながる活動）は？ また生徒が家庭で過ごす時間は長く、保護者に意識して欲しいところもある。家庭でできる、外化につながるトレーニングとは？

A：親が子どもの話を聞いてあげることである。その際に注意して欲しいことは、親が親自身の価値観を押しつけ過ぎないこと、また逆に「何でもいいよ」「子どもの好きにすればいいよ」と子ども任せにしてしまうことである。



職員研修会（授業改善）

平成28年10月5日（水）

＜研修会の流れ＞

1. グループの名前とリーダーを決め、発表。
2. 「基礎学力を本気で定着させるために【チーム庄総】は何をすべきか？」を討論！
 - ・事前にアンケートを取り課題をピックアップ。

【「基礎学力定着」のための課題】

- ①学習習慣の確立（家庭学習も含む） ②義務教育段階の「学びなおし」
 - ③生徒が興味・関心を持てる授業の工夫 ④授業ルールの徹底。授業以前の凡事徹底
 - ⑤評価の検討（テストの内容など） ⑥進路目標の設定
3. グループ毎、課題を選んで討論し、発表。

＜記録＞ 1. テーマ別討議内容と具体的な取り組みの発表

Chaos(テーマ3) ・生徒が自分で体験して学ぶことが大切・生徒に興味があるテーマを自分で選ばせる・他の人と協力して作業をさせる⇒前の時間に行った内容を必ず小テストにする

ツーフー(テーマ3)

- ・生徒に将来との関連付けをもたせる ・身近なテーマを教材とする
 - ・頭を使って覚えるのが苦手なので、体を使って覚えさせる など
- ⇒マナートレーニング：帰りのHRで基礎的な問題を解かせ、できた生徒から帰す

ぐり and ぐら(テーマ3)

- ・生徒が興味をもつように地域に出す ・説明をアニメーション等で行う
- ・興味をもっても長続きがしない、家庭科の課題など「できればそれでいい」という考えで過程を大事にしない ⇒1年次～3年次を通した小テスト、学力クラスマッチなどを考える ・取り組み状況の悪い生徒にはペナルティーを課す

フラットタイヤー(テーマ1)

- ・「生徒が勉強しない」という先生の声が多い ・ノートは取るが考えない
 - ・目標がうすい、庄総は勉強しなくてもいいと考えている ・1年次からの定着が課題
 - ・テストが悪くても課題をだせばいいやと考えている←我々の甘さ？
- ⇒授業で必ず宿題を出し、評価に入れる

チームポジティブ(テーマ4)

- ・体育などで行っているように、1年次からルーティンを決めて徹底させれば落ち着いて授業に取り組めるのでは ・「わかりません」と言わせない、聞いていなかったら「聞いていませんでした」・授業にもよるが、本を読むときに立たせる、立たせないの徹底
- ⇒ベル着を1年次から定着させる、1学期に徹底して行う

クールファイブ(テーマ5)

- ・生徒は本を読んでもその意味を理解できていない・速度と時間の関係が理解できていない ・根気強く覚えさせるしかない⇒年間で数回基礎学力テストをできないものか。

職員研修会（授業改善）

平成28年12月9日（金）

＜研修会の流れ＞

1. 各班（今回は5班編成）で「進行役」「発表者」を最初に決める。（2分）
 - ①基礎学力定着の具体的方策（研究授業 前期を終えて）について考える。
 - ②授業で効果があると思われた方法」「授業以外に必要な取り組み」について、思いつく限りポストイットに書きこむ。（5分）
 - ③記入したものを、各班、イーゼルパッドに貼り付けていく。（3分）
2. 今後の具体的な取り組みについて、「1」で貼ったメモをもとに「効果」「実行性」について各班で話し合う。生徒の基礎学力向上のために効果的で実行しやすい取り組みは何かを絞っていく。（15分）
3. 各班、イーゼルパッドを使いながら発表する。（10分）
4. 発表を受けての質疑・応答（10分）

＜記録＞

1 班：（カオス）

- ・生徒の興味関心を授業に向けさせることが重要。
- ・手立ての一つとして、小テストを実施して勉強するよう仕向ける。

2 班：（フラットタイヤ）

- ・生徒の学習に向かう姿勢を確立させる
 - ①まず、目標を明示する。その授業の目標が生徒にはっきりわかるようにさせる。
 - ②予習をさせる。この予習は評価の対象とする。
（生徒に予習させる内容がその次の授業の中につながるものにする。）
 - ③知識の積み重ねによって、生徒のグループワークができる力につながる。⇒基礎力の向上

3 班：（ポジティブ）

- ・記憶を定着させる積み重ねが大事。5教科でどう仕掛けていくか。どうすれば生徒に記憶を定着させることができるのか、の工夫をしていく。生徒が面白いと思わせるような工夫を。
- ・朝読、新聞を読んだだけでは力はつかない。読んだ内容について生徒同士が話し合うような場を作っていくべき。それが生徒がアクティブになるということなのではないか。さまざまな取り組みをさせても、生徒自身が作業しているように感じているうちは、効果はない。

4 班：（クールファイブ、ツーフー）

- ・朝学習、新聞など、ただ取り組ませるだけではなく、生徒に話し合う場を設ける。また、朝学習に取り組ませる際に、絶対に遅刻させないよう徹底する。家庭学習の定着はなかなか容易なことではない。

5 班：（グリ&グラ、ツーフー）

- ・授業に取り組む前段階をしっかりさせる。ベル着席、授業道具の準備、体調管理など。
- ・小学校、中学校の学び直しをする時間を作る。⇒授業での確認テスト、居残り学習（補習）等
- ・定着度の確認テストをする。⇒たとえば、漢字10級～、計算5級～等

校長より：世の中に出て困難な状況にぶつかってもたくましく生きていける生徒を育てていけるよう、全職員が同じ方向を目指して指導にあたっていただきたい。

【高校生の基礎学力定着に向けた学習改善のための調査研究事業】＜先進校視察・外部研修の記録＞

高校教育フォーラム2016

平成28年8月6日（土）～7日（日）

メルパルク京都 参加者：五十嵐一明

8月6日【大学の部】

- ・レクチャー1「エビデンスベースで生徒の学習と成長を可視化する」
溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）
- ・レクチャー2「アクティブラーニングとしての反転学習」
森朋子（関西大学教育推進部教授）
- ・レクチャー3「アクティブラーニングで学ぶ日本の古典」平野多恵（成蹊大学文学部教授）
- ・レクチャー4「数学的リテラシーの観点から高大接続と大学入試を考える」
高橋哲也（大阪府立大学学長補佐・高等教育推進機構教授）
- ・会場ショート討論&質問票書込み

8月7日【大学の部】・パネル・ディスカッション――質問への回答と1日目の総括

【高校の部】

- ・実践レポート①「能代高校のキャリア教育を振り返る」吉田英亮（秋田県立能代高校教諭）
- ・実践レポート②「外部資源・外部人材を活用した新たなキャリア支援の試み―教育・労働・福祉の連携―」金澤信之（神奈川県立田奈高校総括教諭）
- ・高校現場からの報告①「今、『フクシマ 南相馬』で」川村葉子（福島県立原町高校教諭）
- ・高校現場からの報告②「社会に貢献できる人材となるために―自己実現ではなく、社会で何を担うべきかを考える―」宮北純宏&柳生高志（西大和学園教諭）

【ランチタイム・ミーティング】

【特別企画】村上育朗（教育未来研究会「そうぞう」）と高校若手教員によるセッション

【パネル・ディスカッション】「高校におけるキャリア教育をどう展開するか」

岩佐峰之（京都市立西京高校主幹教諭）・岡恵美子（三重県立松坂高校教諭）

皆川佳美（広島県立尾道北高校指導教諭）・大堀精一（学研アソシエ）

司会：福永文子（ライター：学研アソシエ）

＜アクティブラーニング（AL）についての参考例＞

（1）個人→協働→個人のサイクルを意識した授業（2）グループ学習に向く教材、向かない教材の洗い出し（3）なぜアクティブラーニング型授業をするのか？→生徒に理解させる必要がある→その前に教師側の理解が必須（4）ALによって、自分は「何をやったのか」「どんな力がついたのか」が自分の口で表現できるレベルまで行っていないといけない。（5）ALは最初の授業が大事。人の話を聞くマナーやルールの確認。（6）ALによってどんな生徒を育てようとしているのか。どのような学校にしていこうとしているのか。教師間のコンセンサスと校長のリーダーシップが大前提（ALの意義と担当者やっていることを周知させる）。（7）現場の忙しさの中でブラック度が増している現状→社会に開かれた環境作りが必要。異学年、卒業生、地域人材の活用が求められる→「学びのデザイン」（8）「わかっているつもり」からスタートした方が、その後、個人の発展が進む。（前もって、動画を見せるとか、本を読ませておくなど）⇒カリキュラムマネジメント

「教育改革先取り対応セミナー【仙台会場】」

1 日 時：平成28年8月8日（月）

2 会 場：メルパルク仙台

3 参加者：教頭 秋野 昌弘、 教諭 齋藤 昭子

4 内 容

（1）第1部 全体会（13：00～16：00）

- ① 主催者挨拶 (株)ナガセ 常務取締役 加藤 伸
日本教育新聞社 取締役広告局長 池上 文雄
- ② 来賓挨拶 宮城県教育委員会 教育次長 西村 晃一
- ③ 基調講演 教育改革の全体像（高大接続改革を主に）について
大学入試センター理事・副所長
前 文部科学省大臣官房審議官（高大接続・初等中等教育局担当）
伯井 美徳
ア）「高大接続改革」の理念と経緯 イ）高等学校教育の改革
ウ）大学教育の改革 エ）大学入学者選抜の改革
オ）まとめ
- ④ 特別講演
 - ・アクティブラーニングと21世紀型スキル
公立はこだて未来大学システム情報学部教授 美馬 のゆり
 - ・英語4技能教育
東進英語科講師元「英語教育の在り方に関する有識者会議」委員 安河内 哲也
 - ・官民協働海外留学支援制度「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム【高校生コース】の概要」
文部科学省 官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学JAPAN
【日本代表プログラム】～高校生コースリーダー 名達 健介

（2）第2部 分科会（16：10～17：10） ※秋野、齋藤は分科会Bに出席

- ① 分科会A 「入試英語4技能化の指導」 東進英語科講師 安河内 哲也
- ② 分科会B 「高校の先生によるアクティブラーニング実践例」
公文国際学園高校 数学教諭 綿貫 祥英
- ③ 分科会C 「大学教育改革・個別入試改革」
東北大学 高度教養教育・学生支援機構 教授 石井 光夫

5 セミナーに参加して

今年度より3年間、本校が取り組む「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」の背景となる高大接続システム改革についてのセミナーであり、興味を持って参加した。特に高等学校教育改革の中での学習指導要領改訂の方向性や、「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の役割についてお話を伺うことができた点は収穫と言える。また、はこだて未来大学の「プロジェクト学習」14年間の実践は、研究チーム内で学生の役割分担を明確化するなど、大学と高校の違いこそあるものの、本校3年次生が取り組む「卒業研究」の今後の在り方にも示唆を与えるものと考えられた。

学び直し先進校の視察報告書

山形県立庄内総合高等学校

教諭 白 旗 悠

- 1 視察校 山形県立新庄北高等学校最上校
- 2 訪問日時 平成 28 年 10 月 25 日 10:00～13:00
- 3 訪問者 教諭 小松久美子 教諭 白旗悠 2 名
- 4 対応者 新庄北高校最上校 田村裕 教頭
教務担当 石川奈津子 教諭

5 訪問概要

(1) 学校説明（田村教頭 10:00～10:40）

生徒数や入学者の傾向、学力等について説明を頂いた。全校生徒 80 名で、地域行事やボランティアなどへ積極的に参加しており、地域からも期待を集めている。卒業後の進路は地元企業への就職がほとんどだが、4 年制大学への進学者も見られる。

学校設定教科「リラーニング」を導入し、国語・数学の基礎的・基本的な内容について、習熟度別学習を行っている。

(2) 「リラーニング」授業参観（10:50～11:40）、説明（11:50～13:00 石川教諭）

通年 2 単位で実施し、教頭を除く全教員が指導に当たる。

年度当初にテストを実施して習熟度別に分け、その後は国語・数学についての基礎的な問題演習を行う。教材は Benesse マナトレや自作のプリントなどで、年間 4 回のまとめテストを実施している（定期考査期間とは無関係）。

参観した授業は、第 2 回まとめテスト（国語）の振り返り時間にあたり、すべてのクラスを見学させていただいた。印象的だったのは、どのクラスにおいても生徒が前向きに取り組んでいることで、寝たりする生徒はほとんどいない。積極的な発言なども見られ、テストの復習時間でありながらアクティブな授業が展開されていたと感じた。

参観後の説明ではさらに詳細をお聞きした。

① クラスの進度

それぞれのクラスで進度や内容は異なる。テストの結果や問題の正誤は細かくデータ化され、生徒のつまずき、弱点となっている分野などがわかるようになっている。上位と下位の差は大きいため、進度は合わせずに生徒の実態に応じて授業を展開している。まとめテストもクラスごとに異なる問題で実施する。少人数かつ習熟度別のため、同じようなつまずき、課題を抱えた生徒への対応が丁寧にできる。

② 評価について

まとめテストの点数や平常点を基本に、生徒の実態に応じた評価を行っている。

③ 生徒の姿勢について

年度当初のオリエンテーションで、社会に出て求められる力を進路指導も含めて説明している。卒業後も必要であるという意識は生徒も持っているため、意欲が高い。生徒の感想も好意的で「やって良かった」という声が多い。

④ 教材について

Benesse マナトレや自作の教材を使う。クラスごと進度が異なるため教材の作成や教材研究には多くの時間を割いている。特に、国語のマナトレ基礎編は難易度としてもちょうどよい。

⑤ 朝学習について

リラーニングとは別に、問題演習や読書などを実施している。8:20より開始。

⑥ なぜリラーニングを行うか

生徒の基礎学力が不足していることへの危機感を全職員が共有できたことで、現在の取り組みにつながっている。少人数校だからこそ可能なのではないかな。

(3) 視察を終えて

本校生の学力も非常に下位層が重く、普段の授業でも知っているだろうという言葉が知らなかったり、簡単な計算もおぼつかないシーンが多くなっている。今回訪問した新庄北高校最上校も、同等の学力の生徒が多いと言える。

最上校の徹底した学び直しへの取り組みは、生徒のモチベーションも高く効果を上げていると感じた。参観した授業内容も、本校生にとっては適度な内容ではないかと思われる。何よりも職員が一丸となって危機意識を持って指導にあたっていたことが印象的で、最上校の取り組みは「基礎学力定着」という課題について、大いに示唆を与えてくれるものであった。



←教科ごとに色分けされたファイル
(ユニバーサルデザイン)

リラーニング授業風景→



桐蔭学園アクティブラーニング公開研究会 2016 参加報告

山形県立庄内総合高等学校 教諭 井上 鉄也

1. 参加日時 平成 28 年 11 月 12 日 (土) 13 日 (日)

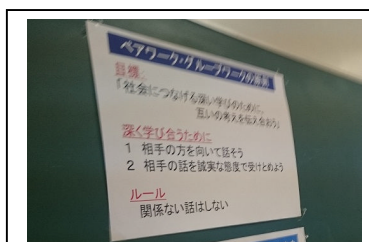
2. 参加概要

11 月 12 日 (土) 12 : 00 ~ 16 : 30

(1) 公開授業① 女子部 高 1 数学 前田 美幸先生

「指数・対数関数でモデル化された現象の問題解決学習」

教室には、「目標」、「深く学びあうために」、「ルール」(図 1)、「授業に取り組む気持ちは姿勢に出ます」(図 2) というプリントが掲示されており、授業に臨む上での心構えが示されている。



(図 1)



(図 2)

最初に宿題が課せられていたもので、隣同士机をあわせ、ペアで確認した。生徒の解答は **ipad** で撮影し、スクリーンに実際に投影し、該当生徒が発表した。計算過程の疑問点など積極的に質問されていた。

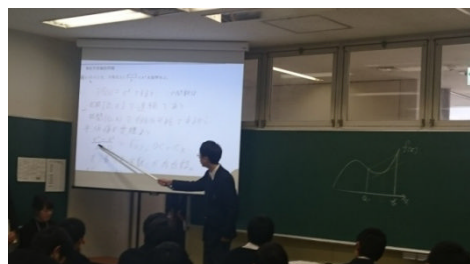
その後、問題 2 に取り掛かる。ペアワークの際の机はそのまま、まず個人で解き、ペアで (1) (2) については解答を確認しあった。(3) (4) については、グループになって協働活動を行っていた。(3) (4) が完成した 2 つの班について、代表生徒が前に出て発表した。最後に生徒は一人一人の振り返りシートに記入を行っている。

始礼と終礼の際に、「礼」の掛け声とともに「お願いします」「ありがとうございました」と自然に出てくるところや、生徒が発表している時は生徒の方向をきちんと見ているところ、そして、最初の課題を皆取り組んでできているところなど、本校の取り組むべき最初の部分の指標になるのではないかと感じた。

(2) 公開授業② 男子部 高 2 数学 袴田 英康先生

「反転授業への試み 数Ⅲ微分法」

反転授業ということで、生徒は自宅で事前に配信されている動画をみて事前学習が終わっている。配信動画はベネッセの「classi」を使用している。きちんと予習してきたかどうかは、ペアで内容を確認、生徒に定理の内容を説明する、そして小テストでの確認だった。小テストは全員がきちんと取り組んでいる様子だった。代表者 2 名が発表を行ったが、その際質問の時間を設け、疑問点について質問がだされた。発表生徒が回答に困っていたが、他の生徒にお願いしたり、先生が補足説明したりした。



本題の問題は 3 題用意されていた。各自で考える時間を 3 分、その後グループになり協働活動をおこなった。そしてグループの代表が発表を行ったが、質疑応答については指摘されて、班の他の生徒に応援を要請

して、質疑に応じていた。最後に先生が補足して疑問点や指摘点を説明していた。公開授業の1時間目と同様、発表を聴く時の生徒の姿勢がきちんとしていた。問題の性質上、個で解く時間を何分に設定するかというところがポイントになるような気がした。グループで協働中に先生に対して、質問をする班もあるが、そのときに先生がアクティブになりすぎると、「質問すれば先生が何か言ってくれるだろう。」という甘えが発生し、その時点で生徒の思考が停止してしまうので適切な支援が必要であるということであった。

(3)公開授業講評

授業を視察した3人の先生方からの講評の中で、ペアワークのルールである「人の目を見て説明すること」と「聞き手はうなずいて聞く」ということができていたという点から、ペアワークやグループワークの際のルールをきちんと設定することが大切である。「習得」→「活用」→「探究」のサイクルから、また「習得」に戻っていくことで「再習得」し、最初の「習得」で「わかったつもり」から「わかった」になり、知識として身につけていく。脳は出力依存型であり、「習得」の部分については予習についても真摯に考えるべきである。

11月13日（日）9：00～12：40

(1)基調講演 関西大学教授 森朋子 氏

「アクティブラーニング型授業としての反転授業「わかったつもり」から「わかった」へ」

(2)全国の実践報告

①「総合学習『サイエンス』アクティブマインドの下支え～生徒と教師の共同作業～」

かえつ有明中学校高等学校 教諭 山田 英雄 氏

②「化学実験における器具の協同学習」

大阪府立四條畷高等学校 教諭 三好 達夫 氏

③「中学校社会科における反転授業の実践」

北海道教育大学附属函館中学校 教諭 郡司 直孝 氏

④「福岡から全国へ ～アクティブラーニングの歩み～」

福岡県教育センター 指導主事 瓜生 純子 氏

3. 研究会に参加してみて

今回の研究会に参加して、生徒がいかに「わかったつもり」をつくって、授業に臨んでいくか、ここが本校の課題でもある。そのためにも基礎学力の定着がどのように図られるかを学校全体で取り組んでいかなければならないのではないだろうか。1, 2年生の外部模試の結果からも、下位層が多数であり、「わかったつもり」以前に「わかったつもり」がつかれない状態の生徒も少なからずいる。生徒評にある「庄総＝宿題のない学校」の通り、家庭学習時間のほとんど0の生徒が大多数である。2つの公開授業を参観した時にも、家で行うべき課題にきちんと取り組んで授業に臨んでいた。本校独自のアクティブラーニング型の授業は現在それぞれの先生方が模索中であるだろうが、「学び直し」の部分も含めて、この部分がなんとかクリアできるように、学校の体制の基盤づくりをしていく必要があるのではないかと感じた。

5. 『高等学校基礎学力テスト（仮称）』に関する試行調査・研究事業

（1）事前準備

【R S T試行調査】

- 調査概要 リーディングスキルテストをP C上で実施できるか事前に確認するための調査
- 調査期間 平成29年8月23日（火）～8月29日（月）の間に、1年次3クラス、2年次2クラスで20分程度の試行調査テストを実施。
- 調査機関 国立情報学研究所 社会共有知研究センター
- 調査内容 W e bサイトに準備された調査アプリを実行し、試行調査用のテストが正しく動作するかを確認。
- 調査結果 一部のパソコンで、テストの途中でI Eが強制終了することがあった。

【C B T環境調査】

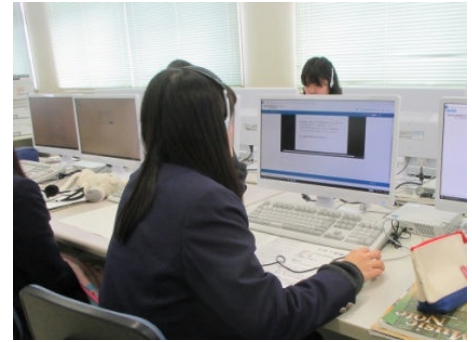
- 調査概要 『高等学校基礎学力テスト（仮称）』に関するC B T試行調査がオンラインで実施可能であることを確認するための調査
- 調査日 平成28年12月27日（火）
- 試行調査運用業者
株式会社内田洋行
今回の訪問調査では、ウチダエスコ株式会社が調査を担当。
- 調査時間 9時30分～17時30分
- 調査内容 C B T試験で扱う音声データ、動画データが途切れることなく流れるかを商業実践室と情報処理室の合計80台のP Cで通信状況を確認。
- 調査結果 80台すべてのP Cでオンラインによる試行テストが実施可能
- そ の 他 C B Tの問題には一部、音声が流れる出題がありヘッドホンが必要になることが判明。教師機と生徒機を合わせて82台分のヘッドホンを内田洋行より提供していただいた。

（2）試行テストの実施

- ① 期間は平成29年1月16日（月）～20日（金）
- ② 今年度の試行テストでは以下の3種類を実施
 - ・オンライン方式によるC B T（国・数・英）... 1・2年次生全員
 - ・ペーパーによるR S T（リーディングスキルテスト）... 1・2年次生全員
 - ・英語スピーキングテスト... 1年次生はランダムに各クラスから5名、2年次生は選択科目のコミュニケーション英語Ⅱを受けている生徒から各クラス5名を選出。
- ③ C B Tについては、『高等学校基礎学力テスト（仮称）』に関する試行調査を行う全国12校の中で本校が最初に実施するため、C B Tの開発に携わっている関係企業に初日の英語の試行テストに同席いただいた。

- ・株式会社内田洋行（試行調査運用）
- ・ウチダエスコ株式会社（通信環境調査）
- ・株式会社インフォザイン（C B T開発）

④ R S Tは事前の試行調査をパソコンで行ったが、本試行では小冊子の問題が準備されH R 教室で実施した。小冊子の出題は6パターンあり、クラスの中でも一人ひとりが違ったパターンの小冊子が配布された。回答の仕方の説明と本試験を合わせても30分程度で終えるテストであった。



⑤ C B Tはインターネットに接続されたパソコンで実施することが決まったが、情報教育用のパソコンが設置された教室は2教室であること、また、平常授業でもパソコンを使用する科目があり、1年次の3クラスあるいは2年次の2クラスを同時に実施することはできなかった。

テストは本試験が50分と定められていたため、パソコンの起動とC B TにログインするW e bサイトを開くための準備時間を確保する必要があった。

問題への回答は選択式と記述式があり、記述の場合は英文、日本語、数式を入力する必要があったが、1年次の『社会と情報』の科目でW o r d、E x c e lの実習を行っていることもあり、キーボードからの入力が問題になるようなことは見受けられなかった。

⑥ スピーキングテストは英語科の教員3名が口答での試験を実施し、評価までを行った。

（3）課題と反省

- ・監督前の授業が組み立てづらい。（前の時間に授業がある場合）
- ・コンピュータに頼りすぎ。紙面でのテストで良い。
- ・実施にあたり複雑な操作が多く、トラブルにも対応できないものがある。
- ・ネットワークの接続速度が遅く、生徒の集中力が途切れる。
- ・コンピュータが途中でフリーズしたり機器の不具合が困った。
- ・C B Tに関してはパソコンの状態もあり、スムーズに進行しない教科があった。しっかりとした調査結果が得られるのか心配。R S Tは文章を読まずにページをめくる生徒もいて、やはり「読む」「書く」「理解する」といった基礎が重要だなと思いました。
- ・C B Tに関してはネット環境が改善されなければ何ともならないと思いました。
- ・生徒同士が隣合わせで座席が近い状態であったので、いくら注意しても隣の画面をのぞき見したり、小声で話す生徒が無くならなかった。
- ・英語のスピーキングテストを実施したが、日頃の授業で実践している内容であったものと、そうでなかった内容とがあり、授業の改善の参考になった。
- ・学校全体としての取り組みになり、職員も生徒もこの事業の方向性が見えたのではないと思われる。